

# 野村和代 学位論文審査要旨

主 査 神 崎 晋  
副主査 花 木 啓 一  
同 前 垣 義 弘

## 主論文

A study on the incidence and comorbidities of autism spectrum disorders accompanied by intellectual disabilities in Yonago city, Japan

(日本の米子市における知的障害を伴う自閉症スペクトラムの発生率と併存症についての研究)

(著者：野村和代、山口美保子、横山まどか、汐田まどか、大野耕策、前垣義弘)

平成31年 Yonago Acta Medica 掲載予定

## 参考論文

1. Reliability and validity of autism diagnostic interview-revised, Japanese version

(日本語版自閉症診断面接改定版の妥当性と信頼性)

(著者：土屋賢治、松本かおり、八木敦子、稲田尚子、黒田美保、井口英子、小山智典、神尾陽子、辻井正次、酒井佐枝子、毛利育子、谷池雅子、岩永竜一郎、小笠原恵、宮地泰士、中島俊思、谷伊織、大西将史、井上雅彦、野村和代、萩原拓、内山登紀夫、市川宏伸、小林秀次、宮本健、中村和彦、鈴木勝昭、森則夫、武井教使)

平成25年 Journal of Autism and Developmental Disorders 43巻 643頁～662頁

2. 発達障害児の親を対象としたPTの実態と実施者の抱える課題に関する調査

(著者：松尾理沙、野村和代、井上雅彦)

平成24年 小児の精神と神経 52巻 53頁～59頁

3. 強度行動障害の再検討その1強度行動障害特別処遇事業における対象事例の支援・経過  
についての分析

(著者：野村和代、鈴木将文、井上雅彦、杉山登志郎)

平成20年 小児の精神と神経 50巻 291頁～296頁

# 学 位 論 文 要 旨

A study on the incidence and comorbidities of autism spectrum disorders accompanied by intellectual disabilities in Yonago city, Japan

(日本の米子市における知的障害を伴う自閉症スペクトラムの発生率と併存症についての研究)

知的障害のない自閉症スペクトラム (ASD) は、出生前から存在する脳の機能異常が原因とされるが、知的障害を伴うASDの原因や併存症は多岐にわたる。知的障害を伴うASD事例を調査し、その発生率と関連因子を検討する。

## 方 法

鳥取大学医学部附属病院脳神経小児科外来と鳥取県立総合療育センター外来に発達の問題を主訴に受診し、1995年4月～2001年3月末に出生し、2011年1月末の時点で米子市在住の患者のカルテ抽出を行った。DSM-IVの基準から自閉性障害・広汎性発達障害と診断された患者を抽出し、最新の知能検査によるIQ/DQ69以下の事例について併存症を調べた。なお、DSM-IVは2014年にDSM-5に改訂され、自閉性障害や広汎性発達障害は、自閉症スペクトラム (ASD) に統一されたため、本研究では“ASD”の用語を用いた。

## 結 果

調査対象児は81名 (男児59名、女児22名) であり、出生1万人あたり76.2人であった。対象患者の調査時の年齢は8歳11カ月～14歳10カ月であった。男女比は2.7:1であった。IQ/DQの数値が得られたのは73事例であった。残り8事例は、有意味語が出ておらず検査実施が不可能であったため重度と判定した。IQ/DQの分布は、34以下 (重度) が32.1%、35～49 (中等度) が18.5%、50～69 (軽度) が49.4%であった。在胎週数についてカルテから情報が得られたのは47名で、平均38週5日であった (SD=19.7日)。出生時の体重についてカルテから情報が得られたのは53名で、平均2995.4 gであった (SD=549.9 g)。

出生時の父親の年齢については49名で、平均34.1歳であった (SD=14.2)。出生時の母親の年齢については53名で、平均30.7歳であった (SD=9.9)。出生時の父親の年齢の比率は、20～25歳未満:5名 (9.8%)、25～30歳未満:14名 (28.6%)、30～35歳未満:18名 (38.3%)、35～40歳未満:11名 (23.4%)、40～45歳未満:1名 (2.1%) であった。母親の年齢の比率

は、20～25歳未満：6名（11.3%）、25～30歳未満：18名（34.0%）、30～35歳未満：26名（49.1%）、35～40歳未満：2名（3.8%）、40～45歳未満：1名（1.9%）であった。

ASDに関連する併存症は25事例（30.9%）に認めた。周産期の異常の有無についてデータが得られた事例は53名で、周産期異常のある事例は11名（11/53、20.8%）であった。超低体重出生（1000 g未満）が1例、低出体重児（2500 g未満）4例、新生児仮死3名、胎便吸引症候群3名であった。他の併存症は、染色体異常・先天異常4名、てんかん7名、先天性の脳の発生異常4名、家族性の発達障害1名、後天性脳障害1名であった。

## 考 察

米子市における知的障害を伴うASD児の発生率は、出生1万人あたり76.2人であった。先行研究と比較すると高い数値であった。臨床的には、知的障害をともなう事例についても、幼少期には目立たなかった自閉症特性が知的な発達が伸びるにつれて、顕著になるという事例は少なからず存在している。本調査の対象患者の年齢は8歳11カ月～14歳10カ月であり、ASD症例を十分捕捉していると考えられる。

近年、様々な研究者により周産期・新生児期のASDの危険因子に関する報告があり、低出生体重、胎便吸引症候、父親の高年齢、母の高年齢、父母の高年齢があげられる。しかしこれらは知的障害をもたないASD児についての検討が多く、知的障害を有する自閉症児について、そのまま当てはめるには注意が必要である。本研究ではIQ70未満の事例を対象としているが、父親の平均年齢は34.1歳であり、知能障害のないASDと同様に高齢であった。一般に、軽度～中等度知的障害に比べ重度知的障害は発生頻度が極めて少ない。本研究において、ASDにおける重度知的障害の比率は24.7%と高く、重い知的障害がASDと関連していることが示唆された。

てんかんは自閉症の併存疾患としてよく知られるところであり、本研究においても、7例に見られた。一方、脳性麻痺においては従来の研究では合併はないとされていたが、近年では少しずつ合併についての報告が出てきている。本研究では、脳性麻痺は1例見られた。染色体異常や先天異常にASDの合併が多く、今回の検討では3例であった。

## 結 論

DSM-5により自閉症スペクトラム障害の概念は拡大したが、知的障害を伴うASDではその原因ごとの特徴や予後を検討し、治療・支援を講じていくこと重要である。これには知的障害を伴う自閉症と他のASDを区別し、検討を重ねていくことが必要である。